

Title	<Review> Robert J.J. Wargo, The Logic of Nothingness : A Study of Nishida Kitarō, University of Hawai'i Press, 2005.
Author(s)	森野, 雄介
Citation	年報人間科学. 34 P.223-P.227
Issue Date	2013-03-31
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/24971
DOI	10.18910/24971
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈書評〉

Robert J.J. Wargo***The Logic of Nothingness: A Study of Nishida Kitarô***

University of Hawai'i Press, 2005.

森野 雄介

はじめに

本稿では Robert J. J. Wargo の著作『無の論理：西田幾多郎研究』(2005)を扱う。この著作は西田幾多郎の最初の著作である『善の研究』(1911)から中期である『一般者の自覚的体系』(1930)までを扱った研究書である。タイトルが示すように、この著作では西田の「絶対無」が中心的な主題となる。

Wargo は『善の研究』から『一般者の自覚的体系』までの変遷をたどると同時に、西田の著作を貫くモチーフを捉えようとしている。この試みは成功しているといえるだろう。読者はこの著作を読むことで、西田の思想の見取り図も受け取ることができるはずである。

また、Wargo の提示する西田像は非常によく整理されている。そのためこの著作は研究者だけでなく、西田幾多郎の思想に興味を持つ人にも勧められるものである。また、西田自身の思想を明快な形に置き直すとはいえ、タームごとのまとめを単純に並べるといったものではない。西田の教え子である久松真一や野田又夫、高坂正顕らの論考の引用、もしくはカントやヴィトゲンシュタインなど西洋哲学との比較を通じて丁寧に西田の思想が論じられていく。

それでは、まず著者の略歴を簡潔に紹介し、この著作で提示された西田研究における有用な観点を数点考えていきたい。

著者略歴

Wargo のこの著作『無の論理』は、南山大学学術叢書のひとつとして刊行された。南山大学では James Heisig が中心となって日本思想を扱った英語著作をいくつか出版しているが、この著作はその中のひとつである。

Wargo は日本に留学経験を持つアメリカ人である。留学の際には、西田と直接の繋がりが深い野田又夫に学んでいたようである。また、数年前までは明星大学の教員として日本で教鞭をとっていた。

本書の構成

Wargo の西田解釈で特徴的なのは (1). 西田を純粋に哲学者として扱おうとしている点、(2). 西田の試みの中でも「主客の対立の乗り越え」を最も評価している点、である。

(1) に関して、Wargo は西田が宗教家ではなく哲学者であると主張する。Wargo は西田の宗教性を重視する解釈を批判する。しかし、それは単純な批判ではなく、西田の思想での「禪」の重要性も踏まえている。

(2) に関して、Wargo は西洋哲学史上の数々のアポリアが主体と客体を切り離した結果生じる擬似問題であるという立場を取る。そして彼は西田の試みの一つと言える「主客の乗り越え」に注目する。彼の解釈では、この「主客の乗り越え」は西田の思想内の一貫した試みであり、西田の思想の中で最も積極的なものである。この点に関しては最後に詳しく論じたい。

それでは章立てを簡単に見ていこう。

一章では西田の『善の研究』以前の明治時代の思想家と西田との比較が行われる。この一章は重要なものであると評者には思われることから、後ほどここをピックアップしていきたい。

二章では『善の研究』の「純粹経験」と『自覚に於ける直観と反省』の「自覚」が中心的に論じられる。

「純粹経験」とはおおまかに言えば「思慮分別を挟まない体験」であり、「主客」が分離する以前の「経験」のことである。『善の研究』では、一瞬の体験に見られるような「利那的な純粹経験」と、たとえばプロのピアニストが演奏をするときのような「習慣としての純粹経験」のふたつが論じられる。

Wargo は「純粹経験」を解釈するうえで、経験の「統一性」が重要であることを述べる。さらに、Wargo の解釈では「統一性」は「純粹経験」が論じられなくなった後にも西田の思想に引き継がれるものである。ここでの「統一性」とは、意識が事実と直接に触れあい、ひとつの体系をなしていることであるが、この「統一性」は後の「具体的一般者」に引き継がれていく。

ついでこの章では、『自覚に於ける直観と反省』(1913 - 1917) で導入される「自覚」と「絶対自由意志」が論じられる。『自覚に於ける直観と反省』は、西田が『善の研究』に欠けていた認識論的な枠組みを論じる著作である。この著作では「A が A に於いて見る」という「自覚」の働きが、認識論的な枠組みとして導入される。そして、この著作の後半部分では「自覚」の最下層としての生命そのものの躍動性が「絶対自由意志」として論じられる。

Wargo はロイスやフィヒテの思想と対比しながら「自覚」概念の中心的な枠組みを論じていく。また彼は「絶対自由意志」に関しては『自覚に於ける直観と反省』の西田の序文を引用し、「絶対自由意志」は西田にとって失敗した試みであったと結論づけている。しかし、この失敗はその後の論文に見られる「意志」から「直観」への転回の準備となったとされる。

三章では西田の「絶対無」を理解するための手引きとして、禪における詩句、そして西田の教え子で禅者である久松真一の著作『東洋的無』が検討される。久松によれば「東洋的な無」とは単なる「非存在 (Non-Being)」ではなく、「有」と「無」を超越し、同時にその根底にあるものでもであると述べる。

ふつう、「禪」においては言語表現よりも直接的な体験が重んじられる。Wargo によれば、自己の参禅体験を哲学的に表現することを望んだ西田の立場は独創的なものである。また、ここで論じられた「東洋的無」についての Wargo の考察は、この章以降で彼が西田の「絶対無」を論じるうえでの一つの手引きとなる。

四章では『働くものから見るものへ』(1927) に収録されている論文「場所」が主に述べられる。この論文は、

私たちの認識の構造を「於いてある場所」として階層的に捉えることを目指した論文である。

Wargo はここで「場所」概念へのアプローチとして「論理的側面」、「(科学) 認識論的側面」、「存在論的側面」という3つの観点を提示する。「論理的側面」としては「赤は色である」という例が論じられる。「(科学) 認識論的側面」として、西田が量子力学の「場」理論に興味を持っていたことが強調され、「場」理論と「場所」の関係性が述べられる。「存在論的側面」ではさきほどの久松の論考が手引きにされている。ここでは「有」、「相対的無」、「絶対無」のそれぞれに考察が加えられている。

最後に五章では、『一般者の自覚的体系』が扱われる。この章はこの著作でもっとも力が注がれたものである。『一般者の自覚的体系』とは、西田が論文「場所」で提示した構造をより綿密にまとめあげた著作である。この著作での「行為」や「表現」、「身体」の重要性は最晩年まで引き継がれる。そのため、西田の思想全体を考えるうえで、この著作は最も重要なもののひとつと言えるだろう。しかし、この著作は西田の思想がまさに生成していく時期の作品である。そのため内容は非常に複雑であるが、Wargo は西田が提出した多様な概念をひとつずつ丁寧に、簡潔に論じていく。

また補遺として『一般者の自覚的体系』内の「総説」という西田の論文の英訳が収録されている。

「善の研究」成立以前

それでは、さきに重要な部分としてあげた一章の内容の紹介に移りたい。一章では西田の『善の研究』以前の明治時代の思想家が扱われる。

まず『善の研究』成立以前の思想的風土として、鎖国の後、西洋文化と急激に接触したことからの思想的な混乱が論じられる。そして Wargo は明治時代の日本の当時の知識人のあいだに起こった西洋文明の受容を巡った意見の類型をふたつ取り上げていく。そのひとつが「新しいシステムに対する全体的で無批判な受容」であり、もうひとつが「新しいシステムを技術の領域のみにおさえる」といういわゆる「和魂洋才」の立場である。

彼によれば、西田幾多郎、田辺元も後者の立場に分類することができる。そして、後者の思想潮流の中心的な先導者として明治時代の思想家がふたりあげられる。東洋大学の創立者であり「お化け博士」というニックネームを持つ井上円了(1858 - 1919)と、帝国大学で初めての哲学教授である井上哲次郎(1856 - 1944)である。

近年、再評価の動向もある井上円了はさておき、井上哲次郎と西田幾多郎の思想の関連性を論じるとなると少し不思議に思う人もいるだろう。なぜならば西田幾多郎は帝国大学哲学科の研究生として井上哲次郎に直接学んでいたが、西田は最後まで井上哲次郎に肯定的な評価をあたえることはなかったからである。しかし、Wargo はそのことに言及したうえで、西田幾多郎と井上哲次郎には思想上の強い関係性が見受けられるとする。

井上円了と井上哲次郎の思想は、明治以前の孔子や大乘仏教といった思想的風土と西洋哲学との統合を目指したものであり、その方向性は西田に大きな影響を与えた。そして、その方向性は具体的には唯物論と観念論の対立の乗り越えという形として結実する。

Wargo は、井上円了の『哲学一夕話』(1886 - 1887) という対話篇が論じる。この作品で円了は唯物論者と観念論者との対話を通じて、二つの立場が共にアポリアに落ち込むことを示す。少し突飛だが、そこで作品の登場人物の師匠が現れ、唯物論と観念論のどちらの立場でもない「中道」が提唱され、この作品は終わる。

Wargo によれば、この円了の作品は若い西田に大きな感銘を与えたとする。なぜならこの作品は、日本の思想家による西洋哲学の乗り越えという試みとして、ほとんど最初のものであったからだ。

井上哲次郎の著作の中では『我世界観の一塵』(1894)、『現象即實在論の要領』(1897) のふたつが論じられる。これらの著作の中で井上哲次郎は現象と實在という対立の乗り越えに取り組む。ここで興味深いところは、井上が西田の『善の研究』のように経験論に非常に近接した立場をとっていることである。

井上の意見では、細胞なき有機体が存在しないように、私たちの知覚と實在は分離したものではない。たとえば、物の固さは私たちの身体を通しての知覚から得られるものである。井上の立場では、「物の固さ」という客観的な単位のみを真理とし、私たちの身体的な知覚を忘れ去ることは、細胞なき有機体が喋ろうとするようなものである。ここで井上は現象と實在とは分離したものではないことを強調する。この現象と實在の対立の乗り越えという試みは、『善の研究』など西田の著作にも見いだせるものである。

さて、Wargo は西田の『善の研究』は井上円了、井上哲次郎らと比較すると、やはり独創的な著作であると結論づける。なぜなら、円了、哲次郎には論理化の過程でやや不整合な部分も見受けられるからだ。しかし、忘れられがちな明治の思想家に直接スポットライトが当てられたことは大きな意味をもつだろう。

おわりに

それでは、最後にさきほど述べた Wargo の「主客の乗り越え」の重視という特徴について考えていきたい。少し批判的なコメントになるが、ここは評者にとっては西田の思想を考える上でもっとも重要な論点であるため強調しておきたい。

まず、なぜ「主客の乗り越え」という試みを評者が受け入れることができないかを述べてみたい。

Wargo は「主客の乗り越え」の結果として見いだされる「絶対無」を一元論的な図式で捉えており、その結果「絶対無」にすべてを静的に回収してしまっている。その解釈では、西田の思想の大きな特徴である「矛盾」としての動性が失われてしまうのではないだろうか。西田の言葉では「個物と考へられるものは、絶対に独立なるものでなければならぬ、何処までも自己自身を限定するものでなければならぬ」¹⁾ とある。この「個物」とは、一元論的には何処までも回収できないものではないか。

この「矛盾」としての動性は西田の晩年に「非連続の連続」というひとつの形に結実するものである。そしてこの「非連続の連続」は「対象化しえない有」と「対象としての有」という対比的な「ふたつの有」として、西田の思想の最初期からその萌芽を見受けられることができる。このことを今から確認していきたい。

『善の研究』にまで「非連続の連続」を読み込むことは、少しやりすぎであるだろう。なぜならば、『善の研究』では、Wargo の言葉を借りるならば、経験の「統一性」が重視され、対象を判断する作用は軽視されるからだ。

しかし、『自覚に於ける直観と反省』では「対象化しえない有」が「自らを映す」と形で「対象としての有」を生み出すことが述べられる。この対象化しえない有が対象としての有を映し、発展していくありかたが「自覚」である。

Wargo 自身も四章で少し扱っているが、論文「場所」では抽象的一般者からの「ある」と具体的一般者からの「ある」は区別され、上記の「ふたつの有」は明確に対立している。

『一般者の自覚的体系』での「ふたつの有」の位相は、論文「場所」とほとんど同様であるが、その後の『無の自覚的限定』になると「対象化しえない有（ないしは無）」の範囲が押し広げられ、「永遠の今の自己限定」という時間論の位相を取る。ここで詳しく論じることはできないが『無の自覚的限定』に見出される「対象化しえない有」は事実の総体、つまりは世界の始まりから終わりまでを含む「場所」である。

この「ふたつの有（ないしは有と無）」が交錯する形で描かれる「行為的直観」をあわせて考えるならば、「主客の乗り越え」ではなく、「非連続の連続」こそが初期から後期まで受け継がれるひとつの通奏低音ではないだろうか。

西田はしばしば「絶対無」ばかりに興味を取られ「現実」を見捨てたのではないかと批判される。しかし西田のテキストに沿えばそれは正当な批判ではない。評者としては、あくまで西田の「現実」にこだわった側面から考えていきたい。そのため Wargo の言うように「主客の乗り越え」を西田の最も積極的なところとして評価することはできない。なぜなら「主客の乗り越え」を最も積極的であると評価することは、その果てに見出される「絶対無」のみを強調することになるのではないかと、評者には思われるからである。

しかし、Wargo は「主客の乗り越え」を軸に論じることで、海外の人も容易に理解できる西田の思想のクリアな全体像を提示している。この著作は全編通じて内容の密度が濃く、叙述も非常に明快である。評者が論じることができなかった優れた点も他に多々見出すことができるだろう。この著作は今後の西田研究を考えていく上で、ぜひとも「なければならぬ」一冊であろう。

注

- 1) 西田幾多郎「形而上学序論」『西田幾多郎全集 第七巻』、岩波書店、1949年